地域と学校　その4

新校舎建設委員会の発足

小松 尚（名古屋大学大学院環境学研究科准教授）

暑い夏が終わって子どもたちが学校に帰ってきました。早速9月29日の運動会に向けての準備が始まりました。今年着任された校長先生が子どもだった頃には、運動会は地域のお祭りの次の日に行われていました。お祭りのご馳走を運動会で食べたそうです。またお祭りの日も地区毎にずらしていたのだそうです。みんなで楽しむための知恵でしょうか。

さて今回は、新校舎建設に向けてのはじめの一歩をお話しします。

劣化が進むRC造校舎

RC造校舎が竣工したのは昭和50（1975）年ですが、平成の時代になって、建物の劣化によるトラブルに見舞われるようになりました。平成7（1995）年に教頭として着任したKs先生は、雨漏りがあり、壁が所々剥離し、さらには水道管も破裂する建物にほとほと参ったそうです。雨漏りや壁の剥離の原因は、コンクリートに海砂が使われていたことが原因でした。

平成9年に育友会（PTA）会長になり、その後新校舎の建設委員会長となるOtさんによると、Otさんの会長時代から改修や建て替えの話がちらほら出てくるようになりました。Otさんは自治会の集まりなどで当時の町長（現市長）に面会する度に、その要望を伝えました。町長からの返事は、「まず地元から盛り上げてください」というものでした。

平成4（1992）年から毎月一回発行（現在は2カ月に1回）されている育友会（PTA）の広報誌『広報いしぐれ』をめくると、その頃から育友会を中心にした動きが読み取れます。

平成12年2月29日号では「何とかしなければ、我が石小、校舎問題」という囲み記事があり、「子どもの命に関わることだから早急にお願いしたい」「育友会の強力な取り組みが必要なのではないか」「もっと多くの人に観てもらう必要がある」といった育友会理事会であがった意見が紹介されています。平成12年度には校舎問題が重要な活動の一つになり、『広報いしぐれ』でも校舎の改修や建て替えに関する記事が登場します。

かぶり厚のモルタルが剥離するなど、劣化が進んでいました（石本建築事務所提供）

そして、平成13年1月26日号では町長の校舎建て替えに対する積極的な発言が紹介され、翌2月には木造で新築された美杉村の美杉南小学校の視察に出かけるなど、気運が盛り上がってきました。

平成13年度は育友会活動の最重要課題が校舎新築となり、6月には町長と育友会が正式に面会し、話し合いが行われました。町長は、高齢者施設や体育施設、学童保育施設などを併設し、地域に開くという理念をもった学校にしたいこと、そのためにはより広い用地が必要であり、町として購入の対応を行いたいこと、校舎建設は長期にわたるので、建設委員には一貫して務められる方を選んでほしいといった意向を語りました。

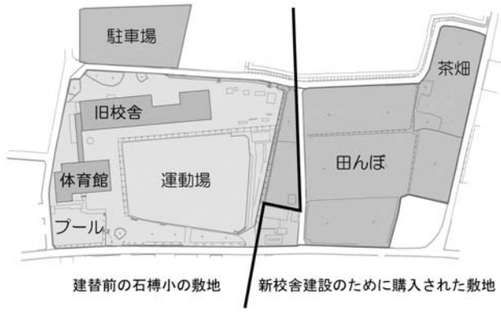
町長は地域主体の学校づくりを進める意思とイメージを既に持っていたわけですが、それには平成8年8月8日に行われた「大安夏祭りYA・YA・YA」がきっかけになったようです。これは、各地区で行われる恒例の祭りではなく、大安町民の手作りの夏祭りでした。市民の実行委員会による祭りの成功に、市民でできる!とふんだようです。

ここから、校舎建て替えのための動きが急速になっていきます。

石樽（いしぐれ）小OBが集結した建設委員会

翌7月には、校舎の建て替え計画を立案するための建設委員会がいよいよ発足することになりました。準備会を経て、7月20日に第1回の建設委員会が開催されました。メンバーは町の教育委員1名、議会議員2名、自治会長2名、学窓会（同窓会）2名、育友会6名、歴代育友会2名、学校長、教頭の17名です。この中から、かつて育友会長を務めたOtさんが委員長に選ばれました。

旧校舎での授業風景（石本建築事務所提供）



4人の地主から購入し、学校敷地は1.7倍になりました

この茶畑（現在は学校の「にこにこ農園」）を残して、南側に新校舎が計画されていきます（石本建築事務所提供）

Otさんは石樽小学校が所在する地区の自治会メンバーであったので選ばれたのですが、育友会だけでなく子供会の理事も2度務めたことがありました。ご本人も、石樽の子どもや学校と縁が切れないなぁと思いながら引き受けたそうです。しかし周りからは、「よう引き受けたなぁ」とか「役所が全部決めているから無駄だぞ」とだいぶ言われたそうです。

建設委員の人選は、教育委員会が中心になって学校に精通した地域住民を選びました。ここまでは従来の行政のやり方通りです。しかし、教育委員会のKoさんは「白紙に皆さんで絵を描いてくださいね」と伝えました。石樽の人々の強いつながりは行政も認めており、町長の意向でもある地域の核となる学校を建設するには、つくっていく過程が重要だと考えていました。これには、前号（その3）にも登場したHkさんが「昔は役所ができあがった図面を持ってきたもんだ」とビックリしつつも喜んでいました。

とはいえ、Otさんはじめ地元のメンバーに新しい校舎の具体的なイメージがあったわけではありません。唯一、木造で建てたいと多くのメンバーが思っていました。ここに集まったメンバーは皆、木造校舎の石樽小学校で学び、育った世代です。木造校舎はよかったな、RC造の校舎は味気ないな、という気持ちがありました。

8月に教育委員会が作成した、議論のためのたたき台の絵には、木造校舎案と木造・RC造併用の案が用意されました。最終的に実現した案とは配置など全く異なりますが、木造へのこだわりが読み取れるものでした。

この時の議論には、基本理念として太陽光発電や風力利用などの環境的配慮を志向することや多目的ホールの活用、地域の特色を生かすことなどが挙げられています。特に多目的ホールの活用は、図書館とパソコン室の一体化など今日的な学習方法への対応のほか、地域住民の利用が想定されていました。さらに、先述の木造校舎案とRC造併用案のどちらにも地域総合施設という棟が記されていました。これは先述の町長の意向の反映でもあり、またこの建て替え計画の重要方針であることがこの後に確認されたのでした。

学校用地の買い足し

同じ頃、大安町の他の小学校は大規模改修を行っていたので、石樽小学校も改修で済ます可能性がありました。しかし、石樽小学校の児童数が大きく変化しない中で、今も給食準備室と調理実習室が兼用だったり、情報処理教育のためのパソコン室が必要だが、そのための空き教室がないこと等から、増築をするならば建て替えようということになりました。そのためにはもっと広い敷地が必要というのは、町長はじめとする関係者の思うところでしたので、この建て替え計画に先立って敷地を買い足すことを決断します。

とはいえ、相手のあることです。先祖代々の農地をそう簡単に提供してくれるわけではありません。現在の新校舎が建つ土地には4人の地権者がいましたが、水面下の買い取り交渉はそうすんなりとはいきませんでした。しかし、最終的には学校のことだからと承知してくれたようです。この交渉は全て建設委員会に任されました。行政の仕事は最後の契約などの事務処理だけでした。

この買い足しによって、敷地は1.46haから2.46haに拡張されました。これによって比較的余裕を持って建て替えの計画ができたことや、工事期間の学校への支障が少なかっただけでなく、来訪者用の駐車場28台のスペースが職員用26台とは別に確保できました。教育委員会のKoさんも各地の学校視察を重ねる中で、駐車場の重要性を認識しており、先程紹介した、たたき台の絵にも、広い駐車場が明記されていました。

実際に、車が重要な交通手段になっている石樽において駐車場が確保されている効果は予想以上でした。現在、体育館や地域利用ゾーン内の特別教室や石樽ホール、会議室が学校とは関係のない地域の行事や活動に活用され始めています。

このように用地の目処も立ちましたが、建設委員会メンバーにとっては新校舎のイメージがこれ以上具体的にあったわけではありません。さて、ここからどうしたらいいのか?

きっと行政がなんらか道筋をつけてくれるのだろうと皆思っていました。でも、行政の方も具体的なイメージがあるわけではなかったのです。